



TITLE:

「洛陽伽藍記序」 割記

AUTHOR(S):

神田, 喜一郎

CITATION:

神田, 喜一郎. 「洛陽伽藍記序」 割記. 東洋史研究 1947, 9(5-6): 229-252

ISSUE DATE:

1947-08-15

URL:

<https://doi.org/10.14989/145837>

RIGHT:

「洛陽伽藍記序」割記

神田喜一郎

はしがき三則

一、この割記は「洛陽伽藍記」を校讀するに際して
いささか備忘のために書き留めておいた覚え書
の一部である。

二、わたくしの使用した「洛陽伽藍記」の各本は左
の通りである。

- (一) 明如隱堂刊本（但し原刻本未見、董氏誦芬堂
景印本に據る）簡稱「如隱本」
- (二) 「古今逸史」所收本 簡稱「逸史本」
- (三) 「廣漢魏叢書」所收本 簡稱「漢魏本」
- (四) 「津逮秘書」所收本 簡稱「津逮本」
- (五) 「學津討原」所收本 簡稱「學津本」
- (六) 「眞意堂三種」所收本 簡稱「眞意本」

- (七) 清吳若準「集證」本（道光十四年原刻本）簡
稱「集證本」
 - (八) 同上（光緒二十九年說創齋刊本）簡稱同上 特
に必要ある場合のみ「說劍本」と稱し前者と區別す。
 - (九) 「龍谿精舍叢書」所收、民國唐晏「鈎沈」本
簡稱「鈎沈本」
 - (一〇) 民國張宗祥合校本 簡稱「合校本」
 - (二) 「四部叢刊第三編」所收本 簡稱「四部本」
 - (三) 民國周延年注本 簡稱「周注本」
 - (三) 「大正大藏經」所收本 簡稱「大藏本」
- 一、本文として標出するものは、凡て如隱堂本に従
つた。

洛陽伽藍記序

逸史本・漢魏本には「洛陽」の二字が無く、序の字の下に「例」の字がある。

この序は全文が隋の費長房の「歷代三寶記」卷九に引用せられてゐる。後人が「洛陽伽藍記」を引用したものととして、おそらく最古に屬するであらうが、校勘に資する所が尠くない。また唐の道宣の「大唐内典錄」卷四にもこの序文の大意を摘録してゐるが、同じく参考になる。猶ほ「歷代三寶記」や「大唐内典錄」を引用する場合は、特に注記する以外、凡て大正藏經に據つた。

魏撫軍府司馬楊街之撰

逸史本・漢魏本には魏の字の上に「後」の字がある。後魏とは言ふまでもなく元魏を曹魏に對して便宜上區別するために、後人のつけた名稱である。それを魏の舊臣たる楊街之が用ゐる筈はない。彼れはこの序文の中に、魏のことを「皇魏」と稱してゐる位である。逸史本や漢魏本の「後」の字は明らかに後人の加筆である。然し元來この署名の一行は果して本來かうあつたものかどうか甚だ疑はしい。「歷代三寶記」卷九を見ると

洛陽伽藍記五卷 或爲一大卷

右一部五卷。期城郡太守楊街之撰。

とある外、唐の道世の「法苑珠林」卷一百・傳記篇・雜集部にも

洛陽伽藍記一部五卷。元魏都期城郡守楊街之撰とあり、同じく道宣の「續高僧傳」卷一の元魏菩提流支傳の中にも

期城郡守楊街之撰洛陽伽藍記五卷。

とあり、また「大唐内典錄」卷四にも

雒陽地（恐らくは衍）伽藍記五卷 或爲七卷

右期城郡守楊（楊の譌）街之撰

とあるから、ここに楊街之の官銜を以て撫軍府司馬としてゐるのは、本書の元來の署名に見えてゐたものとは思はれない。いつたい楊街之の官歴として古書に見える所は、この期城郡太守の外に、唐の道宣の「廣弘明集」卷六・辨惑篇二に

楊街之。北平人。元魏末爲秘書監。

とあるのと、楊街之自ら本書卷一の「果林南有石碑一所」に下に

永安中年。莊帝馬射於華林園。（中略）街之時爲

奉朝請。

と言つてゐるのとのみである。その撫軍府司馬となつたといふのは、宋の陳振孫の「直齋書錄解題」卷八に

洛陽伽藍記五卷

後魏撫軍司馬楊街之撰

とあるのを以て初見とする。陳氏の見た「洛陽伽藍記」には、おそらく今本に見るが如き署名が既に存在したので、それに本づいたのであらうが、古い史料に楊街之が撫軍府司馬 なつたといふ證據は見當らない。わたくしはこれを否定しようとするのではないが、少くとも楊街之が「洛陽伽藍記」を著した時、この官に在つたものとするには疑問を懷くのである。

楊街之、委しい傳記は分らない。近時周延年は「洛陽伽藍記注」の末に「楊街之事實考」を載せ、その中に楊街之の出自について

抑元魏之時。門閥方盛。街之殆亦名家子。詳考

北史及魏書。楊氏達者。無北平籍。而魏書陽固傳。

固字敬安。北平無終人。有三子。長休之。次詮之。

三未詳。北史固傳稱有五子。長休之。休之傳云弟緄之。次俊之。與街之名字排行頗爲相近。休之且長於文學。爲史官。有聲當時。則北平陽氏以文學傳家。已可概見。街之若果爲陽姓。其爲休之弟及族昆弟。必無疑矣。

との新説を提出してゐる。おそらく従ふべきではあるまいか。さうすると楊街之の楊は宜しく陽に作るべきであり、また唐の劉知幾の「史通」卷六補注篇や宋の晁公武の「郡齋讀書志」卷二の「洛陽伽藍記」の條などに羊 作つてゐるのも、同音通用といへないことは、いが、誤であつたといふことになる。獨り高麗藏本に依據した大正大藏經本の「廣弘明集」卷六・辯惑篇の本文には陽街之に作つてゐるが、必ずしも偶然とは言へなからう。(大正大藏經第五十二卷・第一二三及び第一二八頁。但し第一二四頁には楊に作つてゐる。)

猶ほ楊街之が本書を撰した主旨について、唐の道宣は「廣弘明集」の同じ條に

見寺宇壯麗。損費金碧。王公相競。侵漁百姓。乃撰洛陽伽藍記。言不恤衆庶也。

と説明してゐる。然しこれは疑はしい。楊街之が自序に言ふ所には、何等さういふ意味は現はれてゐないやうである。何が故に道宣が斯くの如き言辭を弄したかといふと、元來道宣は楊街之を以て排佛論者であつたと考へてゐたからかと思ふ。「廣弘明集」の記事に據ると、唐の太史傳奕が古來の王臣で佛法を訕謗した者二十五人の名を擧げて「高識傳」一帙十卷を作つた中に、楊街之の名が列せられてゐたといふ。さうして道宣は更に楊街之が佛教の虚誕を述べた上書を引用してゐるのであるが、果して楊街之がそれ程の排佛論者であつたかどうかは他に徴證がないのでよくは分らない。「洛陽伽藍記」を通じて見た所では、寧ろ佛教に好意をもつてゐたらしくも考へられる。従つて道宣の如くこの書を以て排佛の主旨から著はされたものとするのは、いささか曲解ではあるまいか。近人余嘉錫なども、その「四庫提要辨證」の「洛陽伽藍記」の條に、いろいろ楊街之の事蹟を考證して、道宣の説に従つてゐるが、わたくしの遽に左袒しかねる所である。それからまたかういふ道宣のやうな説のある一方に於て、それとは

全く反對に、楊街之を以て崇佛論者であるとし、従つて「洛陽伽藍記」も佛教を宣揚するために著はされたものであるとする説がある。楊街之が崇佛論者であつたといふのは、宋の道原の「景德傳燈錄」に本づくもので、同書卷三の菩提達磨傳の中に、楊街之が達磨に西天五印の師承・祖道を質した問答の語を載せ、そこに

有期城太守楊街之。早慕佛乘。

とあり、また楊街之その人の言葉として擧げてゐる一節にも

弟子歸心三寶。亦有年矣。

とも見えてゐる。この記事信するならば、楊街之は篤信の佛教徒となる。説劍本「集證」に見える李葆恂の跋などではこれを信じてゐるやうであるが、元來これは「洛陽伽藍記」卷一永寧寺の條に、偶々楊街之が西域の沙門菩提達磨に會つたといふ記事をしてゐるところから、後世達磨の傳記を書く者が附會虚構したもので、固り信するに足らぬ妄説である。況んや「洛陽伽藍記」をば佛教を宣揚するために著したといふが如き、前の佛教を訕謗するため

に著したといふ説と共に、決して著者の意を獲たものではないと思ふ。要するに楊銜之が「洛陽伽藍記」を著した主旨は、率直に彼れ自ら序文に陳べてゐる所を其儘信すべきで、往時繁華を極めた洛陽の荒廢した慘狀を親しく目撃して、轉た懷舊の情に勝へず、遂に本書を著したといふに過ぎなからう。「四庫全書提要」などもさう視てゐる。近人唐晏が「洛陽伽藍記鈎沈」の序に、更に委しく説明して

嗟乎銜之良史才也。彼蓋身丁元魏之季。見夫胡后貪權。廢長立少。諸王酣豢。縱欲養驕。大臣無元良之佐。宦寺逞城社之威。文士優柔。武夫跋扈。遂以釀成河陰之禍。故此書於爾朱之亂。三致意焉。逮夫變輅西行。邦圻遷鄴。元氏之局告終。渤海之基方肇。而銜之又所目睹。黍離之悲。無可寄慨。乃於洛陽伽藍記託其懷舊之思焉。豈眞爲彼教之助乎。

と言つてゐるのは正しい見解である。

因に楊銜之の著書には「洛陽伽藍記」の外に

廟記一卷

といふものがあつたらしい。「冊府元龜」卷五百五

十六・國史部三・採撰第二に

楊銜之撰洛陽伽藍記五卷・廟記一卷

と見えてゐる。「廟記」といふ書は「隋書」經籍志及び「唐書」藝文志に著録せられてゐるが、それには著者の名が記るされてゐないから、果して楊銜之の著であるか否かは分らないし、また固り現存してをらない。

それから猶ほ一つ元の念常の「佛祖歷代通載」卷九・梁天監二十八年庚申の條に

佛祖傳法偈。按禹門太守楊銜之銘系記云。云云。

として、楊銜之の「銘系記」といふ書を引用してゐる。然しこれも楊銜之と達磨との關係から、後世楊銜之に假託して作られた偽書であつて、決してこんな著書が楊銜之にあつたのではない。常盤大定博士は宋の契嵩の「正宗論」の中に引用せられてゐる「名系記」を以て「銘系記」と同一の書と考へ、その既に契嵩の時代に存在したことを指摘せられてゐるが（「東方學報」東京第四冊所載）（「寶林傳の研究」第二七四頁）近人陳垣の「釋氏疑年錄」卷七に據ると、契嵩は宋の熙寧五年に年六十六を以て示寂したとあるから、少くともこの偽書は北宋の

中葉に既に作られてゐたこととなる。楊銜之の官銜を禹門太守などとしたのも何等根據の無いことである。太守といふからには、禹門は郡名でなければならぬ筈であるが、古來そんな郡の存在したことを聞かない。意ふに「景德傳燈錄」卷三の菩提達磨の傳に、達磨が楊銜之に會つた場所を禹門の三聖寺としてゐる。この地名も寺名も虚構に出たものであるが、それから附會して楊銜之を禹門の太守としたのであらう。

三墳五典之說

各本いづれも同じであるが、唯だ「歷代三寶紀」の高麗藏本だけには「說」の字が「記」に作つてある。

九流百代之言

各本いづれも同じであるが、「歷代三寶紀」及び「大唐内典錄」には「代」の字を「氏」に作つてゐる。意味の上から考へて宜しく従ふべきである。「代」の字では通じない。いはゆる諸子百家のことを百氏といふ例は、夙く「漢書」の敘傳などにも見えてゐる。

並理人區

集證本に「人」の字を改めて「寰」に作り、鈎沈本またそれに従つてゐるが、おそらく集證本の妄改であらうと思ふ。この一句は「義兼天外」といふ下句と對してゐて、その「天」と「人」との二字が對してゐる所に深い意味があるものと感ぜられるからである。猶ほ集證本は、その校記に「寰。毛斧季本・叢書何鑑本。並作人。」と稱してゐる。いつたい集證本の本文は、その朱紫貴の序に「大略所據者如隱堂本。所參考者何氏・毛氏本。復旁及于御覽・廣記・法苑珠林所引。」と言つてゐるのに據ると、大體は如隱本に依據したと見るべきで、これといまの校記に言ふ所とを併せ考へると、恰も如隱本には「寰」に作つてあるが如くに解せられるのであるが、實はさうではなく、わたくしの参照した限り「寰」に作るのは集證本を以て最初とする。

而義兼天外

「外」の字を集證本には「下」に作つてゐる。これも集證本の妄改に相違ない。その他は各本いづれも同じであるが、「兼」の字を「歷代三寶紀」には「無」に作り、「大唐内典錄」には「非」に作つてゐる。

この文意を察すると、楊街之は儒教を抑へて佛教を揚げようとしてゐるのであるから、わたくしは「歴代三寶紀」や「大唐内典錄」の本文の方が正しいのではあるまいかと思ふ。「無」にしても「非」にしても、要するに、この句は、儒教では民生彝倫の理を説くばかりで、天外の義、即ち佛教で説く三界二十天の如き天上の問題には説き及ばない、といふ意味に解せられる。各本の「兼」の字は、その異體を「兼」に作るところから、無の字を書き誤つたものであらう。

一乗二諦之原

「原」の字を「大唐内典錄」には「源」に作つてゐる。楊街之の出た時代の洛陽では、その歴史的地理的關係から特に羅什系統の大乗佛教が榮えた。さうして經典では「法華」・「維摩」、論部では「成實」などが中心として尊ばれた。その事實は塚本善隆氏の名著「支那佛教史研究・北魏篇」の中、特に「北魏石窟に現れたる佛教」の一章に詳しく論證せられてゐる通りである。ここに一乗といふのは、即ち「法華經」などに説かれてゐる所の、一切の衆生は皆佛性を

具へてゐる故に、聲聞・緣覺も俱に菩薩と同、一の證果に到り得るといふ、いはゆる「唯一乘」の教理を指す。二諦といふのは、即ち「成實論」に世俗諦・第一義諦の二義を立てて諸法皆空を説く思想である。

三明六通之旨

「三明六通」を「歴代三寶紀」及び「大唐内典錄」には「六通三達」に作つてゐる。三明と三達とは、佛家の説に據ると大體同じことらしい。織田得能師の「佛教大辭典」の「三達」の條に

三達。羅漢に在て三明と云ふを佛に在て三達と云ふ。天眼・宿命・漏盡なり。天眼は未來の生死因果を知り、宿命は過去の生死因果を知り、漏盡は現在の煩惱を知りて之を斷盡す。之を知ること明らかなるを明と云ひ、之を窮盡するを達と云ふ。

とあり、典據として「大乘義章」二十本及び「大部補註」八を引いてゐる。従つて「三明六通」を「六通三達」に作つても、意味の上にはさうたいした相違はないわけであるが、文章の上からいふと、三明六通の「明」及び「通」の字がいづれも平聲である

から、三明的「明」の字を入聲である「達」の字に作つた方が聲調がよい。然し「歷代三寶紀」や「大唐内典錄」の如く「六通三達之旨」に作るのは、上句の「一乘二諦之原」に對してどうであらうか。前の「三墳五典之說。九流百氏之言。」といふ對句からいふと、ここは「三達六通之旨」に作りたい所である。

因に三明六通といふことは、當時の佛教界ではいろいろ問題とせられたものと見え、後趙の佛圖澄の門下に出た名僧竺法汰が「六通三明同歸。正異名耳。」と解釋したことが、わざわざ「世說新語」の文學篇に一條として擧げてある。

自頂日感夢

「頂」の字を「歷代三寶紀」には「頃」に作つてゐるが、固り誤である。「大唐内典錄」には「項」に作つてゐる。これが正しい。各本いづれも「頂」に作つてゐるが、わたくしは誤であると思ふ。いふまでもなくこの句は、後漢の明帝が夢に金人を見て、始めて佛陀の教の存在を知り、印度に使を遣して法を求めしめたといふ名高い説話に本づいたもので、そ

の明帝の夢に見た金人には、項に日光が耀いてゐたと傳へられてゐる所から、「項日感夢」と言つたのである。説話の出典としては、「四十二章經」の序・「牟子理惑論」・「化胡經」・「後漢紀」・「魏書」・「漢法本内傳」等頗る多く、それを専ら研究したものに佛蘭西の H. Maspéro 教授の "Le songe et l'ambassade de l'empereur Ming. (Bull. de l'Ecole frans. d'Extrême-Orient," tome. X. 1910.) や、我が常盤大定博士の「漢明求法説の研究」(「東洋學報」第拾卷第壹號所載)等の諸論文がある。ここには便宜上「廣弘明集」卷一に載せてある「漢法本内傳」の文を引いておく。

傳云。明帝永平十三年。上夢神人。金身丈六。項有日光。寤。已問諸臣下。傳毅對詔。有佛出於天竺。乃遣使往來。備獲經像及僧二人。帝乃爲立佛寺。畫壁千乘萬騎驪塔三匝。又於南宮清涼臺及高陽門上顯節陵所。圖佛立像。並四十二章經。絨於蘭臺石室。

この「項有日光」の句は、他書に「頂有日光」に作つてゐるものもあるが、いま問題とする「洛陽伽藍

記」の「頂日感夢」の「頂」の字と共に同じく誤である。何故ならば、明帝が夢に金人を見たといふのは、おそらく繪畫や雕刻に顯示せられた頭光背を具した所の釋尊の像を豫想して生じた説話に相違ないからである。現に「洛陽伽藍記」卷四に見える白馬寺の條に、楊銜之自ら漢明求法の傳説を述べて帝夢金人。長丈六。項背日月光明。

と記してゐる。項背とあるからには、その意極めて明瞭で、當然「項有日光」でなければならぬ筈である。その他唐の慧琳の「一切經音義」卷八十五の「辯正論」卷三の音義にも

漢明帝感夢見佛。項後有日光・飛行殿庭。佛神力化也。

とある。項背といひ、項後とある以上、到底「項有日光」ではあり得ないと思ふ。尤も「項有日光」といふのも、全然佛典に根據の無いことではない。蕭齊の曇摩伽陀耶の譯した「無量義經」には、明らかにこれを釋尊の三十二相の第九に擧げてゐる。さういふ所から兩者の間に混雜を生じた上に、「項」と「頂」とは字形が近似してゐるので、遂に後世間違

つたのであらう。前記の Maspero 教授の論文には、漢明求法説を載せた古書に「項有日光」と「頂有日光」との二つの異文のあることを指摘し、いづれが正しいか判定し難いと、言つてゐるのに對し、佛蘭西の P. Pelliot 教授は「牟子理惑論」の譯、即ち "Meou-Tseu ou Doutes levés" ("T'oung Pao," vol. 19, 1920. の注二九八、P. p. 385-386) に於て、わたくしとは全く根據を異にするけれども、やはり「項有日光」の正しいことを主張してゐる。

滿月流光

釋尊はその身に三十二相・八十種好といふ特殊な微妙の相貌を具へてゐたと傳へられる。その名目について、各種の經論によつていろいろ所説を異にするが、それはともかくとして、漢土で最も早く譯された釋尊の傳記ともいふべき後漢の竺大力・康孟祥共譯の「修行本起經」を見ると、その卷上・菩薩降身品に、悉達太子の誕生した時、香山の道士阿夷といふ仙人が、太子を相して作つたといふ偈を載せてゐる中に

頂特生肉髻。髮色紺琉璃。欲度一切故。是以法隆

盛。面光如滿月。色像花初開。是以眉間毫。白淨・如明珠。

といふ一段がある。また同經卷下・出家品に、魔王が釋尊を襲はうとして却て退散せしめられた時に作つたといふ偈を載せてゐるが、その中にも釋尊を讃嘆して

面如滿月色從容。名聞十方德如山。

とある。これと同じやうなことは吳の支謙の譯した「太子瑞應本起經」卷上や西晉の竺法護の譯した「普曜經」卷六などにも見えてゐて、釋尊の面が滿月の如くであつたといふことは、夙くから漢土に傳へられた所である。ここに「滿月流光」と言つたのは、

全くこれに本づく。楊街之と殆ど時代を同じうした北魏の文豪溫子昇が本書卷四に見える洛陽の名刹大覺寺のために撰した碑文（「藝文類聚」卷七十七）の中にも「顏如滿月。心若盈泉。」の句があるし、梁の簡文帝の釋迦文佛像銘（「藝文類聚」卷七十七）に「滿月爲面。青蓮在眸。」とあるなど、當時の文學に用例がある。因にこの釋尊の面のことは、姚秦の鳩摩羅什の譯した「摩訶般若經」卷二十四・四攝品及

び同經の釋論たる「大智度論」卷八十八には、これを八十種好の中に數へ、その第四十に

面淨滿如月

と言つてをり、また唐の玄奘の譯した「大般若經」卷三百八十一になると、これを三十二相の中に數へ、その第三十に

世尊面輪。其猶滿月。眉相皎淨。如天帝弓。

と言ふのみならず、更に八十隨好の中にも數へて、その第五十七に

世尊面輪。修廣得所。皎潔光淨。如秋滿月。

と言つてゐる。但しこれを三十二相に數へたのは、逸見梅榮博士が廣く各種の經典に見えた三十二相の名目を一覽表に作られたもの（「印度に於ける禮拜像の形式研究」所載）に據ると、唯だ一つ「大般若經のあるばかりのやうである。

陽門飾豪眉之像

「豪」の字を逸史本・漢魏本・合校本及び「歷代三寶紀」・「大唐內典錄」には、いづれも「毫」に作つてゐる。かういふ毫毛の意味に用ゐる場合、今日普通には「毫」に作るのを例とするが、毫の字は元來後世の

俗字であつて、實は「豪」に作るのが正しいのである。「説文」の「豪」の字の條に、宋の徐鉉も「今俗別作毫」。

非是。」と注してゐる。北魏の魏靈藏薛法紹等造釋迦像記（金石萃編）卷二十六所載に「求豪光東照之資」とあり、東魏の天平二年に建てられた中岳嵩陽寺碑（金石萃編）卷三十所載に「預捨一豪」とあるなど、當時「豪」の字を毫毛の意味に用ゐた例も尠くない。「歷代三寶紀」も大正藏本の校記に據ると、正倉院聖語藏尊藏の古鈔本には「豪」に作つてあるとある。

この句の意味は「頂日感夢」の條に引いておいた「漢法本内傳」の一節を見れば、自ら明瞭になると思ふ。陽門は洛陽の開陽門のことである。この門については後に委しい記事がある。但し「漢法本内傳」に高陽門とある「高」の字は「開」の誤である。「牟子理惑論」には正しく開陽城門とある。豪眉の像といふのは、釋尊の白豪相のことである。釋尊の兩眉の間には白い細毛があつたといふ。これは前引の「修行本起經」の偈に「是以眉間毫。白淨如明珠。」とあるのを見ても分るが、釋尊の特異の相として名高

く、古來いはゆる三十二相を説く各經論の齊しく一致して傳へる所である。然しここでは必ずしも開陽門に特に白豪相を畫いたといふのではなく、單に佛像を畫いたといふ程の意味に解すべきであらう。

夜臺圖紺髮之形

「夜臺」を「大唐内典錄」には「涼臺」に作つてゐる。但しこれは大正藏本の依據した高麗藏本の本文だけで、大正藏本の校記に據ると、宋・元・明の各本はいづれも「夜臺」に作つてゐるとある。

夜臺は長夜臺の略で、即ち墳墓のことである。魏の阮瑀の七哀詩に「冥冥九泉室。漫漫長夜臺。」とある。前引の「漢法本内傳」に後漢の明帝が顯節陵に佛像を畫いたことが見えてゐるが、この句は即ちその事實を言つたのである。顯節陵は明帝自身の陵であつて、明帝が生前これを營んで、そこに佛像を畫いたことは、「牟子理惑論」にも

明帝存時。預修壽陵。陵曰顯節。亦於其上作佛圖像。

と委しく記るされてゐる所である。「大唐内典錄」に涼臺に作つてゐるのは、「漢法本内傳」に明帝が

清涼臺にも佛像を畫いたことを傳へてゐるので、それをを用ゐたのである。

紺髮の形といふのは、これ亦た佛像のことである。

釋尊の頭髮は紺色をしてゐたといふ。これも前引の「修行本起經」の偈に「髮色紺琉璃」とあるのに據つて知れるが、やはり釋尊の特異の相として、古來これをいはゆる三十二相若しくは八十種好の一に數へてゐる經典もある。「太子瑞應本起經」卷上を見ると、悉達太子の誕生を述べた條に「披髮相太子。見有三十二相。」として、そこに「其髮紺青。眉間白毫。」とあるから、漢土で夙くこの經の譯された三國時代から、少くとも紺髮が白毫と相竝んで三十二相の一として知られてゐたことは確かである。然しこれも顯節陵に特に紺髮の相を畫いたといふのではなく、前の白毫相と同じく單に佛像を畫いたといふ程の意味に解すべきである。

法教愈盛

「愈」の字を逸史本・漢魏本・眞意本・集證本・鈎沈本・合校本・周注本及び「大唐內典錄」にはいづれも「逾」に作り、「歷代三寶紀」には「踰」に作つてゐる。

王侯貴臣棄象馬如脫屣

「屣」の字を逸史本・漢魏本には「履」に作つてゐる。

象馬を棄てるといふのは、須大拏太子の本生譚に本づいたものである。葉婆國に生れた須大拏太子は、性仁慈にして布施を好み、自國第一の寶として父王の愛重する白象を敵國の王に施與したために、父王の怒にふれ、妃及び二兒と共に檀特山に遠謫せられる。その道中、太子はまた自分の乗る車馬を始め、身に攜へる一切の財寶を施與しつくし、遂には二兒及び妃までも施與してしまふ。然し太子はこの布施の德によつて、やがて故國に迎へられて王位につく。これが釋尊の前生であるといふのである。この本生譚は、夙く吳の康僧會が「六度集經」卷二の中に梗概を譯し、その後また西秦の聖堅が「太子須大拏經」を譯したので、漢土では一般によく知られてゐたと見えて、これを石刻にあらはした遺物なども残つてゐる。例へば北魏藝術の精華龍門石窟の賓陽洞にもその圖を刻したものがあるし、洛陽に近い泌陽縣にもその圖を刻した東魏の武定元年の造像碑が

ある。(水野・長廣二氏の「龍門石窟の研究」第二・一八四・一八五頁参照) 北周の庾信の「陝州弘農郡五張寺經藏碑」(「庾子山集」卷十三所載)に「象馬無格。衣裘是捨。」とあるが如きも、全くこの須大擎太子の本生譚に本づいたものである。

脱屣といふのは履を脱ぎずるの意味であるが、凡て物をわけもなく簡単に棄て去つてしまふことに喩へて用ゐる。「辭海」の「脱屣」の條に

史記封禪書。嗟乎吾誠得如黃帝。吾視去妻子如脱屣耳。按脱屣也。如脱屣者。言其至輕易也。漢書郊祀志作脱屣。字又作脫蹠。淮南子主術。堯學天下而傳之舜。猶卻行而脱蹠也。注。言其易也。

とあるのは、最も要領を得た解釋である。

庶士豪家捨資材若遺跡

「庶士」を鈎沈本・周注本には「士庶」に倒してゐる。遺跡といふのは、自分の歩んだ足跡を忘れてしまふ意味で、これまた物をわけもなく棄てて氣にとめないことに喩へて用ゐる。古詩十九首の中の「明月皎夜光」の一首に「不念攜手好。棄我如遺跡。」とある。

猶ほこの「王侯貴臣棄象馬如脱屣。庶士豪家捨資財若遺跡。」の後に、直ぐ語をついで「於是招提櫛比。寶塔駢羅。」とあるが、かういふ事實は元魏の洛陽に奠都して以來盛に行はれた所で、殊に武泰元年のいはゆる河陰の役以後は一層甚しくなつたやうである。「魏書」の釋老志を見ると、「天下喪亂。加以河陰之酷。朝士死者。其家多捨居宅。以施僧尼。京邑第舍。略爲寺矣。」とある。

爭寫天上之姿

釋尊が舍衛國の祇園精舍に移られた翌年、天上に更生した生母摩耶夫人のために忉利天に上つて說法せられた不在中に、篤信の憍賞味國の優填王が造らしめたといふ釋尊の像がある。これを一般には優填王像と稱してゐる。この像のことは「增一阿含經」第二・「觀佛三昧經」第六・「大方便佛報恩經」第三・「大乘造像功德經」卷上に見えてゐる。塚本善隆氏は「支那佛教史研究・北魏篇」の第三八四頁に、この優填王像に由來する釋尊像が、漢土に夙く將來せられ、南北朝時代に盛に傳寫し造顯せられた事實を考證せられてゐるが、ここに天上之姿といふのも、

即ちその像のことであらうと思ふ。

競摸山中之影

「摸」の字を逸史本・漢魏本・集證本・合校本には「模」に作り、鈎沈本及び「歷代三寶紀」には「摹」に作つてゐる。

山中之影とは、釋尊が摩竭提國に入り、伽藍山の苦行林中で、六年の間、端坐思惟、苦行を修せられた當時の有様を畫いた像であらうと思ふ。印度のガンダーラの遺物にもさういふ雕像が残つてゐる。

昭提櫛比

「昭」の字は明らかに「招」の誤である。各本いづれも「招」に作つてゐる。「比」の字を「大唐内典錄」には誤つて「批」に作つてゐるが、それは大正藏本の依據した高麗藏本の本文だけで、宋・元・明の各本は「比」に作つてゐる。

金利輿、靈臺比高

各本いづれも同じであるが、唯だ「歷代三寶紀」には「靈臺」を「雲臺」に作つてゐる。靈臺といへば周の文王の作つた臺のことであり、雲臺といへば後漢の明帝が永平年間に中興の功臣二十八將の像を畫

いた臺のことである。いづれが正しいかは判定に苦しむが、わたくしはどちらかといへば雲臺に作るのを可としたい。文王の靈臺については、誰も周知の「孟子」にも見える通り、文王が民と偕に樂んだといふことを聯想するのが普通の常識で、必ずしも高いといふ觀念を引きおこさない。然るに雲臺については、その名が既に雲ををかすといふ意味をもつてゐて、直ぐに高いといふ考をおこす。「淮南子」の倣眞訓に「雲臺之高。墮者折脊碎腦。」とあり、その高誘の注に「臺高際雲。故曰雲臺。」と説明してある。この「淮南子」の雲臺は單に普通名詞として用ゐたものと想はれるが、後漢の明帝が功臣の像を畫いた所の雲臺も、かういふ意味で名づけられたものに相違ない。わたくしの雲臺を可とする所以である。猶ほこの雲臺は、いまの場合、後句の阿房と對偶になつてゐるので、これを「淮南子」に見えるが如き單なる普通名詞としては受取れないと思ふ。

因に本書卷三の大統寺の條に「寺東有靈臺一所。基趾雖頽。猶高五丈餘。即是漢武帝所立者。」との記事がある。然しいま問題とする所の靈臺を以てこれに

當てゐることは出来ない。本書に記載せられてゐる洛陽各寺の塔には、この靈臺よりも遙に高いものが在つて、さう解しては、ここの文章が全く無意味となるからである。

廣殿共阿房等壯

「廣殿」を逸史本・漢魏本・眞意本・集證本・鈎沈本・周注本には、いづれも「宮殿」に作り、また「歷代三寶紀」には「講殿」に作つてゐる。ここでは金刹と對して佛寺のことを言つてゐるのであるから、宮殿では少し浮泛に過ぎるし、廣殿でも特に佛教とは關係のある字面ではないので、果してどうかと思はれる。さうすると講殿といふことになるが、わたくしはこれを講堂のことと解し、「歷代三寶紀」の本文に従ひたいと思ふ。その講堂と言はずして、講殿と言つたのは、阿房の房の字に對する聲調上の關係であらう。猶ほ本書卷一の瑤光寺の條に「講殿尼房。五百餘間。」とある。尤もこの「講殿」は如隱本を除く各本には「講堂」に作つてあるが、こゝも「講殿」に作るのがよいのではないかと思ふ。如隱本を除く各本の如く「講堂尼房」に作つては、堂の字と

房の字とが疊韻となつて、却て聲調がよくない。わたくしは講堂と言ふべき所をわざと講殿と言つたのであらうと考へる。本書卷一の建中寺の條には、また「以前廳爲佛殿。後堂爲講室。」といふ記事がある。普通には講堂といふのが例ではあるが、必ずしもそれに拘はらないことを見るべきである。尤もこゝも逸史本・漢魏本には講堂に作つてあるが、やはり後人のさかしらに出るものと思ふ。

豈直木衣綈繡被朱紫而已哉

「木衣綈繡被朱紫」の八字は、後漢の張衡の西京賦「文選」卷二所載に「木衣綈錦。土被朱紫。」とあるのを、僅に一字だけ「錦」の字に易へるに「繡」の字を以てし、殆ど其儘踏襲したのである。

亦與時徒

各本いづれも同じであるが、大正藏本の「歷代三寶紀」の校記に據ると、「徒」の字が正倉院聖語藏尊藏の古鈔本には「從」に作つてあるといふ。

至武定五年歲在丁卯

各本いづれも同じであるが、唯だ「歷代三寶紀」には「至武定元年中」に作つてゐる。おそらく誤であ

らう。

城郭崩毀。宮室傾覆。寺觀灰燼。廟塔丘墟。牆被蒿艾。巷羅荆棘。

各本いづれも同じであるが、この六句を「歷代三寶紀」には縮めて「牆宇傾毀。荆棘成林。」の二句に作つてゐる。

農夫耕稼藝於黍雙闕

この「闕」の字は如隱本津逮本を除く外、各本いづれも「闕」に作つてゐる。清の羅振玉の「眼學偶得」に「大戴禮保傳。過闕則下。補注曰。即闕字。嚴氏元照曰。字書不見闕字。疑闕之譌。玉案。五音篇海。闕即闕字。此補注所本。嚴氏云不見字書誤也。唐述聖頌。闕字作闕。闕又闕之婿。」とあるのに據ると、この字が闕の異體であることが明らかである。猶ほ水野・長廣二氏の「龍門石窟の研究」に附載せられてゐる「龍門石刻錄異字表」によつて闕の字の異體を調べると、羅氏の言ふ所の正しいことが、直ぐに實證出来る。

その他の字は各本いづれも同じであるが、「稼」の字を「歷代三寶紀」には「老」に作つてゐる。上句

の「遊兒牧豎」に偶對する點から考へて、ここは「歷代三寶紀」に従つて「農夫耕老」に作るのを可としたい。

黍離之悲

各本いづれも同じであるが、「悲」の字を「歷代三寶紀」には「哀」に作つてゐる。

京城表裏凡有一千餘寺

各本いづれも同じであるが、「表裏」を「歷代三寶紀」には「内外」に作り、「大唐内典錄」には「内」に作つてゐる。「大唐内典錄」は内の下に「外」の字を脱落したのであらう。

今日寮廓

この「寮」の字は如隱本・津逮本を除く外、各本いづれも「寥」に作つてゐる。「寮」の字は「寥」と同音であるので誤つたのであらう。寥廓を遼廓に作つた例はあるが、この本文の如く寮廓に作つた例は見ないやうである。因に大正藏本「歷代三寶紀」の校記に據ると、正倉院聖語藏尊藏の古鈔本には「寒」に作つてゐるといふ。これは「寥」の字の形を誤つたものに相違ない。

鍾聲罕聞

「鍾」の字を各本いづれも「鐘」に作つてゐる。
寺數最多

各本いづれも同じであるが、「最」の字を「歷代三寶紀」には「衆」に作つてゐる。「最」も「衆」も、ものが多くあつまつてゐる、といふ意味で、この場合「最」の字をもつともといふ副詞に解すべきではない。最の字には「聚也」といふ訓がある。「公羊傳」の隱公元年の條に「會猶最也」とあり、その何休の解詁に「最聚也」とある。また「小爾雅」の廣詁篇に「最叢也」とあるが、この叢が聚の義であることは「小爾雅」の注釋書、例へば清の王煦の「小爾雅疏」などを見れば、幾多の例證を擧げて説明してゐる所である。従つて「最多」といふのは、「衆多」といふのと全く同じ意味の熟語である。

上大伽藍

この「上」の字は如隱本・津逮本を除く外、各本いづれも「止」に作つてゐる。文意から察して「上」の字は誤である。

取其詳世諦事

「詳」の字の下に、逸史本・漢魏本・真意本には、いづれも「異」の字がある。また「歷代三寶紀」には「詳」を「祥」に作り、且つ「諦」の字の下に「俗」の字がある。

この句は如隱本のままでは意味が通じない。わたくしは「歷代三寶紀」に引く所の本文、即ち「取其祥異世諦俗事」といふのがおそらく楊街之の原文であらうと思ふ。逸史本・漢魏本などは、その「俗」の字を脱したのであつて、それでも意味は通じないことはない。如隱本は更に「異」の字をも脱してしまつたので、遂に意味が通じなくなつてしまつたのである。猶は「祥異」は「詳異」に作つても同じことである。「詳」と「祥」とは古來相通じて用ゐられた字で、古書にいくらか例がある。「左傳」の成公十六年の條に「德刑詳義禮信戰之器也」とあるが、唐の孔穎達は「正義」に「詳者祥也。古字同耳。」と釋してゐる。

余才非著述

各本いづれも同じであるが、「著」の字を「歷代三寶紀」には「注」に作つてゐる。この文を「大唐

内典錄」には隠括して「並選摘祥異以注述云」としてゐるが、それでは原文に「余才非著述」とあるの
と意味が違ふ。原文は、自分は決して著作の才では
ないので定めて遺漏も多からう、と言つてゐるので
ある。猶ほ楊街之は本書卷一「景林寺」の條に、國
子博士盧白頭のことを記し、そこにも「雖在朱門。
以注述爲事。」と言つてゐる。注述といふ語は、他に
用例を見ないやうであるが、或は楊街之の筆癖であ
つたのかも知れない。さうすると、ここなども「歷
代三寶紀」に引く如く、元來は「余才非注述」とあ
つたのを、誰かが後に「著述」と改めたものとも考
へられないことはない。

後魏高祖遷都洛陽

ここに「後魏」とあるのは、前に本書の卷首に見え
る楊街之の署名の條に述べておいた通り楊街之の筆
に出たものとしてはおかしい。「後」の字はおそらく
後人の加筆であらう。

依魏晉舊名

「名」の字の上に逸史本・漢魏本には「門」の字があ
る。

漢曰東中門

各本いづれも同じであるが、吳若準は「集證」に「按
水經註曰東陽門故中東門也。此二字倒。御覽作中東
門是也。」と言つてゐる。従ふべきであらう。

次南曰青陽門

各本いづれも同じであるが、これについても「集證」
に「按水經註。陽渠水。於城東南隅枝分。北逕清陽門。
故清明門也。則凡青陽清明之青字。皆當作清字。各
本俱脫書水旁。惟何氏本。於城內修梵寺作清陽門。
不誤。」との説を出してゐる。然しこの説は誤であ
る。青陽の「青」が「清」であるべき筈はない。吳
氏の依據した「水經注」はいかなる本か知らぬが、
その引く所に誤がある。趙一清の「水經注釋」にも、
戴震の校定した武英殿聚珍版本の「水經注」にも、
その原文は「穀水。於城東南隅枝分。北注逕青陽門
東。故清明門也。」とあつて、兩本いづれも「青陽」
に作つてゐる。清の楊守敬も、その「水經注圖」の
中の洛陽城圖に、やはり「青陽門」に作つてゐる所
を見ると、青陽を以て正しとしてゐるのである。そ
れから吳若準は「洛陽伽藍記」の各本いづれも「清

明」を「清明」に作るが如く言つてゐるが、これ亦た全く事實に相違する。わたくしの見た所では、「清明」を「青明」に作つた本は、却て集證本を以て初見とし、その他にはこれに依據したと想はれる周注本の在るのみである。吳氏の一時の失檢であらう。

高祖改爲青陽門

各本いづれも同じであるが、唯だ漢魏本のみが「青陽」を「清陽」に作つてゐる。これは清明門の清の字に涉つて誤つたのであらうと思ふ。上の「次南曰青陽門」の句は、漢魏本も正しく「青陽」に作つてゐる。

南面有三門

「三」の字を逸史本・漢魏本・合校本には「四」に作つてゐる。これが正しい。委しくは後の「魏晉曰津陽門：高祖因而不改。」の條を見よ。

東頭第一曰開陽門

この門の命名に關する傳説は、「水經注」卷十六にも「漢官」を引いて、これを傳へてゐる。参考のために引用すると次の如くである。

漢官曰。開陽門始成。未有名。宿昔有一柱來在樓上。

琅開瑯陽縣上言南城門一柱飛去。光武皇帝使來識視良是。遂堅縞之。因刻記年月日以名焉。

遂以開陽爲名

「遂」の字を逸史本・漢魏本には「因」に作つてゐる。また逸史本・漢魏本・眞意本には「開陽」の下に「縣」の字があるが、上文に涉つて誤衍したものと思ふ。

漢曰津門

「津」の字の下に、逸史本・漢魏本・眞意本・鈞沈本・周注本には「陽」の字がある。津逮本・學津本には如隱本と同じく「津門」に作つてゐるが、俱に津の字の下に「一本多一陽字」との注がある。

魏晉曰津陽門

「津」の字を逸史本・漢魏本・學津本・眞意本・鈞沈本・周注本には「宣」に作つてゐる。猶ほ津逮本には「津」の字の下に「一作宣」との注があり、また學津本には「宣」の字の下に「一作津」との注がある。

この文章は如隱本や津逮本の如くでは通じない。吳若準の「集證」にも既に指摘してゐる所であるが、下句に「高祖因而不改」とあるからには、當然ここ

の「津陽」は「宣陽」の誤とせなくてはならぬ。即ち論理上からすると、この本文は「次西曰宣陽門。漢曰津門。魏晉曰宣陽門。高祖因而不改。」とあるべきである。従つて逸史本や漢魏本などの本文の方が論理が通るといふことになる。尤も逸史本・漢魏本・眞意本・周注本の本文には「漢曰津門」を「漢曰津陽門」に作つてをり、この點は問題になるが、ともかく「往の論理だけは通る。然るに「水經注」卷十六を見ると、「穀水又南東屈逕津陽門南。故津門也。穀水又東逕宣陽門南。故苑門也。」とあつて、これを分り易く表示すると

魏	晉	漢
津陽門	津陽門	津陽門
宣陽門	宣陽門	宣陽門
苑門	苑門	苑門

といふことになる。この「水經注」の記事を信ずる限り、漢の津門は、これを魏晉の時代には津陽門と稱してゐたのであつて、今度はいまの改めた本文の如くでは事實に合はないことになる。逸史本や漢魏本などの本文の如くに作つても、漢の時代に津陽門

といふ門は無かつた筈であるから、これ亦た事實に合はないことになる。従つてこの本文は何か誤があるに相違ないと思はれるのであるが、これについて楊守敬はその名著「水經注疏要刪」卷十六に、いま引用した所の「水經注」の本文を挙げ、そこに

按今本洛陽伽藍記。次西曰宣陽。漢曰津陽。是直接以宣陽爲津陽。與注不合。考陸機洛陽記。洛陽有十二門。此漢晉舊門也。元魏高祖增承明一門。是當魏時洛陽有十三門。其南面有四門。第一曰開陽。次西曰平昌。次西曰宣陽。次西曰津陽。何允中刊本。其南面尙有四門。而數之只開陽・平昌・宣陽三門。竟合宣陽・津陽爲一。而又誤以津陽爲漢門。此係傳寫者但知洛陽有十二門。遂妄合宣陽・津陽爲一。當據此注正之。

と述べてゐる。さすがに明快な解釋であつて、さきに標出した本文「南面有三門」の「三」の字が逸史本や漢魏本に「四」に作つてゐることの正しい理由も併せて明瞭になると思ふ。

猶ほ近人張宗祥も合校本に「太平寰宇記」などを引いて、この點をいろいろ論じてゐるが、その結論は

要するに楊守敬の言ふ所と合致してゐる。

南頭第一門曰西明門

合校本に「太平寰宇記。作晉改西明門。」と注してゐる。

有銅璫璣玉衡

「有」の字の上に、逸史本・漢魏本・眞意本・鈎沈本・合校本・周注本には「上」の字がある。また周注本には「璫」の字を「旋」に作つてゐる。

當金墉城前東西大道

逸史本・漢魏本には「當」の字が無い。誤脱であらう。

金墉城のことは、本書卷一の「瑤光寺」の條に委しく見えてゐる。その洛陽城の西北隅内に在つたことは何等疑ない所であるが、吳若準は「集證」に附載してゐる洛陽伽藍記圖に於て、これを誤つて洛陽城の西北隅外に置いてゐる。

城西有王南寺

この「城」は洛陽城を指す。上句の「高祖往在金墉城」の城を承けるのではない。城西は洛陽城外の西である。さうでないとな承明門を通過せないことにな

る。

高祖數詣寺沙門論議

「議」の字を逸史本・漢魏本・鈎沈本・合校本・周注本にはいづれも「義」に作つてゐる。また集證本・鈎沈本・周注本にはいづれも「寺」の字が無い。おそらく誤衍として刪つたのであらう。

この句の意味は、一往卒讀した所では、高祖が屢々王南寺に赴いて僧徒と論議したといふやうに解せられる。然しそれでは文章上少し無理があると思ふ。

當時僧徒の間に佛典を講釋する一つの方法として論義といふのがあつた。二人以上の討論者が出て、佛典の義理を問答しながら闡明してゆくのである。この風習は今日でも奈良の興福寺の慈恩會などに多少残存してゐるのであるが、六朝時代には盛んに行はれたものである。その論義を高祖が聽問するために屢々王南寺に出かけたものと、わたくしは解釋したい。

高祖が佛敎に精しかつたことは、「魏書」の高祖紀に「雅好讀書。手不釋卷。(中略)尤精釋義。」と見えてゐるし、またこれを證するに足る事實も同書の

釋老志に傳へてゐる。

謁帝承明廡

魏の曹植の贈白馬王彪詩の一句である。詩は「文選」卷二十四に見えてゐる。

北面有二門

逸史本・漢魏本には「面」の字が無い。上の東南西の三面の記事にはいづれも面の字のあることから推すと、明かに誤脱である。

營造三層樓

「營」の字を逸史本・漢魏本・眞意本には「帝」に作つてゐる。これについて「集證」に

按李善文選註引陸機洛陽記。大夏門。魏明帝所造。

有三層。高百尺。又水經註。穀水又東歷大夏門下。

故夏門也。陸機與弟書云。門有三層。高百尺。魏

明帝造。據此則營字當從何本作帝。其上脫去魏明

二字。

とあるが、従ふべきであると思ふ。鈎沈本・周注本には、その説に従つて、直にここの本文を「魏明帝造三層樓」に改めてゐる。

去地二十丈

逸史本・漢魏本・眞意本・鈎沈本・周注本には「二」の字が無い。前條に舉げた「集證」の説に據ると、晉の陸機の「洛陽記」及び同じく陸機が弟の雲に與へた書には、いづれも大夏門の樓を以て高さ百尺としてゐる。その他、また「太平寰宇記」卷三に引く所の「魏略」にも「魏武帝于夏門內立北宮。至明帝又造三層樓。高十丈。」とある。従つてこれらの史料に據る限り、ここの「二」の字は誤衍と見へべきで、「集證」に「二字當從何本。衍。」といつてゐるのは正しいと思ふ。然しまた一面に於て、この「洛陽伽藍記」には直ぐ語をついで

洛陽城門樓。皆兩重。去地百尺。惟大夏門臺棟干雲。

と述べてゐるのを看過してはならぬ。もし大夏門が高さ百尺であるならば、その三層樓たると兩重たるとに拘はらず、洛陽城の他の門樓と、高さに於ては少しも變らないわけで、ひとり大夏門のみが臺棟雲ををかすといふことはあり得ない筈である。さう考へると、大夏門の高さを二十丈とする如隠本などの本文の方が論理が通り、必ずしも「二」の字を誤衍

とせられなくなる。この間の矛盾をどう解釋するか、
わたくしは問題であらうと思ふ。

ところでここに逸史本・漢魏本・眞意本・鈎沈本に
は、いづれもこの句の下に

高祖世宗造三層樓。去地二十丈。

の十三字がある。「集證」にはこれを直に衍文として
簡単に片附けてをり、合校本またその説に従つて
ゐるが、果してさう視るべきであらうか。鈎沈本
は「集證」とは少し違つて、「去地十丈」の「十丈」以
下、「去地二十丈」の「去地」に至る十二字を以て
衍文としてゐる。さうすると結局は如隱本などの本
文に従ふことになるのであるが、これはおそらく上
にわたくしの指摘した矛盾に氣附いて、大夏門の高
さを二十丈としたのであらうと思ふ。それからまた
周注本では「集證」とは全く反對に、この十三字を
盡く正文と認めてゐるやうである。その理由は何等
説明してないが、大體ここの本文の如き短い文章の
中に十三字も衍文が生じるといふのは、聊かおかし
いことで、わたくしも逸史本など本文を其儘やは
り正文として信じたいのである。如何に解釋するか

といふと、元來大夏門は魏の明帝の造つたもので、
三層樓をなし、その高さ十丈であつた。然るにその
後、元魏の高祖孝文帝とその子の世宗宣武帝とが、
父子二代かかつてこれを改築し、二十丈の高さのも
のにした。それで大夏門だけが、他の城門に較べて
ひとり薨棟雲ををかしてゐるのである。さういふ風
に解釋出来ないものであらうか。この説の弱點は高
祖と世宗とが大夏門を改築したといふ事實が、いま
の場合「水經注」の如き有力な史料となる書に全く
見えないことであるが、わたくしはこの「洛陽伽藍
記」の本文を、いまのやうに解釋して、却て「水經
注」の記載の闕を補ひたい位に思ふのである。

廣莫門以西

「廣」の字の上に、逸史本・漢魏本・眞意本・鈎沈本・
合校本・周注本には、いづれも「自」の字がある。

一門有三道

「一」の字が學津本には無い。

所謂九軌

この「軌」の字は「軌」の誤刻である。津逮本亦た
如隱本と同じく誤刻してゐる。逸史本・漢魏本・眞意

本・鈎沈本・周注本には「遼」に作つてゐる。津逮本・學津本には「一作遼」といふ注を附してゐる。

追記

さきに記しておいた「注述」といふ語について、その後、梁の僧佑の「出三藏記集」の序に

至漢末安高宣譯轉明。魏初康會注述漸暢。

とある一つの使用例を見出した。康會といふのは康僧會のこと、同書に據ると、康僧會は多くの經典を譯したのみならず、法鏡・道樹・安般等の經典の注解を作つたとあるから、そのことを指して「注述」といつたものらしい。「洛陽伽藍記」は、元來本文と注とに分れてゐたと傳へられるから、その序に「注述」の語の見えるのは、或はその原文であるのかも知れない。

それから「理在人區。而義兼天外。」といふ語は、後漢書の西域傳の序に

神迹詭異。則理絕人區。感驗明顯。則事出天外。

とあるのと措辭の似てゐることに氣附いた。併せて茲に補つておく。

附記

漢土の古典は、經書と正史や諸子の或るものとを除く外、本文批評や注釋が殆ど出來てゐない。これは斯學の研究上、重大な缺陷である。然るに我が邦の學界では、さうした基礎的事業に従ふことを、何故か閑却し、時には蔑視さへしてゐるやうに見受けられる。わたくしはこれを遺憾とし、いろんな古典を校讀するに際して、この割記のやうなものを、少しづつ書いてゐる。いま、かういふ讀んで面白くもない割記を本誌に載せてもらつたのは、これを言はば一つの見本として、特にわたくしの校訂なり注釋の態度や方法について、大方の教示を仰ぎたいと思つたからである。偶々ここに餘白を生じたので、鄙意を述べて讀者諸賢に願ひする次第である。